

「奉仕」ということを思いめぐらすときに引用される代表的なテキストが、ルカによる福音書 10 章 38 節～42 節に出てくるマルタとマリアの物語です。そこにはイエス一行を自宅に迎え入れた姉妹の対照的な姿が描かれます。マルタは「いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いて」おり、マリアは「主の足元に座って、その話に聞き入っていた」とあります。

ここで「もてなし」と訳されている言葉は、ギリシア語ではディアコニアという言葉で、普通は、「奉仕」と訳される言葉です。もともとは奴隷が主人の食卓に仕えて給仕役をすることを指す言葉でした。この時のマルタも、イエスの給仕役になりきろうと張り切っていました。食卓に仕える者として、全力を尽くしてお世話をしたいと心を砕いていたのです。

マルタは思います。「マリアが手伝ってくれさえすれば、万事順調に進むのだ。それなのにマリアと言えば、知らんふりを決め込んで、呑気にイエス様の話に聞き入っている。イエス様もイエス様だ。私は一所懸命もてなそうとしているのに、その気持ちを少しも理解しないで、マリアを一言も咎めず、話を続けておられるのはどういうことか」と。

ついにマルタは堪忍袋の緒を切らし激しくイエスに訴えたのです。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」一瞬、何事が起こったのかと緊張が高まるなかで、イエスはその場のささくれだった雰囲気を読みほぐすように、心をこめてマルタに語りかけます。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

マリアが聞き入っていたのは、「主の言葉」でした。「主の言葉」として、これを聞くということは、主の言葉の支配の中に、自分を入れてしまうということです。それは自分が自分の主人であることを辞めることです。それを取り上げてはならないとイエスはおっしゃるのです。

他方マルタは、恐らく非の打ち所のない働き上手の主婦であったと思います。自分は人のために働いている、奉仕しているという自信がありますから、勢い周りの者は自分に従うべきなのだと思いついてしまったのです。つまり、仕えることにおいて主であるイエスの御前でさえも、自らが主人であり続けようとしてしまったのではないのでしょうか。

このように見てくると「わたしたちの奉仕」の現実がよく見えてきます。奉仕の現場で、しばしば私たちが耳にし、口にもする言葉は、今、ここでマルタの口から出てきた不満ではないのでしょうか。自分はこんなに一所懸命にやっているのに、あの人もこの人も、なんていい加減なのだろう、とつい周りの人々を裁いてしまう思いです。

イエスは誰よりもそのことをよくご存じでした。だからこそ、私たちが、私たちの思いと力だけに頼って奉仕をしようと思う時に、声をかけてくださるのです。あなたがなそうとする奉仕の前に、あなたに必要なことがただ一つある。その必要なことが、欠けている間は、あなたがどんなに善き奉仕をしようとしても、豊かな奉仕となることはないだろう。否、あなたがよく奉仕をすればするほど、あなたはそこで怒りと苛立ちと不満を抱くことになるだろうと仰るのです。

ここで本当の「もてなし」をしておられるのは、実はイエスです。イエスの御言葉の「もてなし」を受けることが一切に先立ちます。その御言葉の宴に加わることで、まず自らが癒やされ、慰められる経験を得てこそ、私たちは自分と共に歩む人に、自分のような者でも、苛立ち裁く思いから自由にされて、愛の手を伸べるができるようになるのです。それはなぜか。ここでこの御言葉を語られる方は、マルタの思いを抱く罪人の私たちのためにも十字架にまで徹底して神に仕え、人に仕え切って下さった愛の主だからです。

主の年 2019 年も、まずもってこの愛の主の御言葉に聴き入り、そのもてなしを受けつつ、それぞれの馳せ場で、愛をもって互いに仕えてゆく者でありたいと願います。